甲第109号証

3/22 中日

敦賀原発

断層データ7年見過ごし

日本原電 重要性気付かず

日本原子力発電敦賀原発（福井県）の敷地を通る浦底―柳ケ瀬山断層帯（浦底断層）で想定より大きな地震が起きる可能性が判明した問題で、判断の根拠となった主なデータは日本原電が二〇〇五年に実施した音波探査で得たもので、約七年見過ごされていた。

日本原電はデータの重要性に気付かず、経済産業省原子力安全・保安院が〇八年に始めた専門家会議でもデータは配布されなかった。その後、産業技術総合研究所の杉山雄一主幹研究員らがデータの提供を受けて分析し、今年三月に断層は少なくとも全長三十五キロあるなどとする調査内容を公表。日本原電は活断層の長さの再検討を始めている。

杉山氏は専門家会議委員を務めており「当時データを全部出していれば判断できた可能性がある」と指摘。日本原電は「求めがあれば（詳細な）データを提示できるよう準備していた」などと説明している。

日本原電が〇八年に国に提出した耐震指針改定に伴う中間報告書では、連動する他の断層を含め浦底断層は最長で二十五キロとするにとどまっていた。保安院の専門家会議でも、浦底断層の見直しにはつながらなかった。

音波探査のデータには、地下の浅い部分で実施した精度の高い調査結果が含まれており、杉山氏らの分析で、一回の活動によるずれは三メートル以上と判明から2～3キロの位置にも複数の活断層があり浦底断層と同時に動く可能性が高いと判明。合計すると、全長は少なくとも35キロになるとみられる。断層は日本原電敦賀原発の敷地内で、1、2号機の原子炉建屋から約250メートルの場所を通っている。

浦底断層（浦底―柳ケ瀬山断層帯）と周辺の活断層

浦底断層と敦賀原発

浦底断層は正式には「浦底―柳ケ瀬山断層帯」の一部。政府の地震調査委員会や日本原子力発電は福井県敦賀市付近を走る約25キロとしていたが、産業技術総合研究所などの分析で、浦底断層